

R-18
Adult Only

ねごとねずみ



作・どんぐり組



ここは、世界で1番 星の光がふりそそぐと言われている夜のまち。
ここには朝もこなければ昼もこないのです。

そんなまちにはひとりぼっちの
ねずみの子がいました。
ねずみはいつもお星さまに願っていました。

「誰か ぼくを見つけてください…」





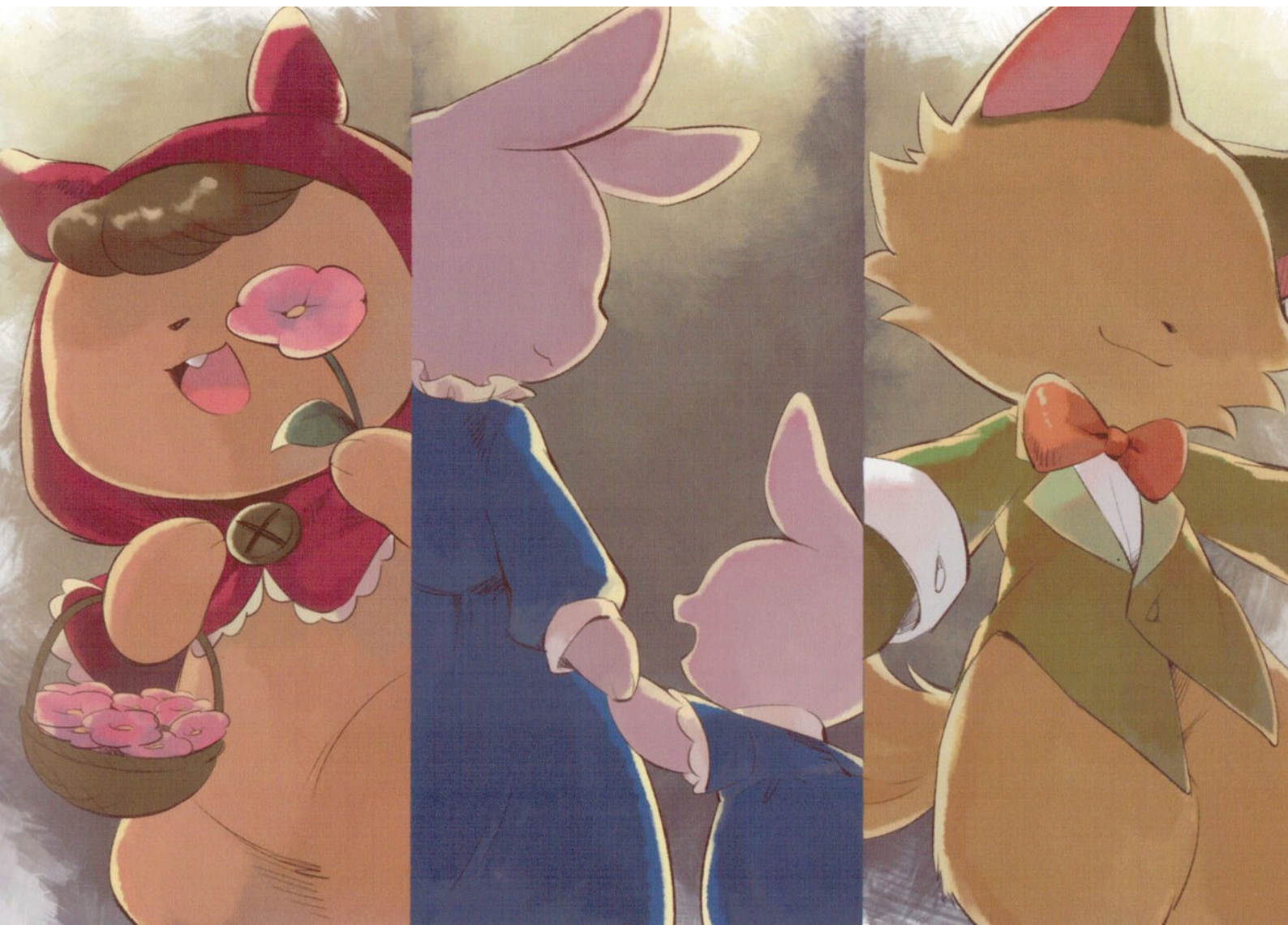
そこには腹ぺこ猫もいました。

「どこかに 美味しい食べ物はないかな…」


彼はいつもごはんに困っています。



ある日、ねずみはまちを歩いていました。
ずきんを被った花売り、手をつなぐ親子、
コインを集めるマジシャン、にぎやかなまち…。
小さなねずみは誰にも気付かれません。





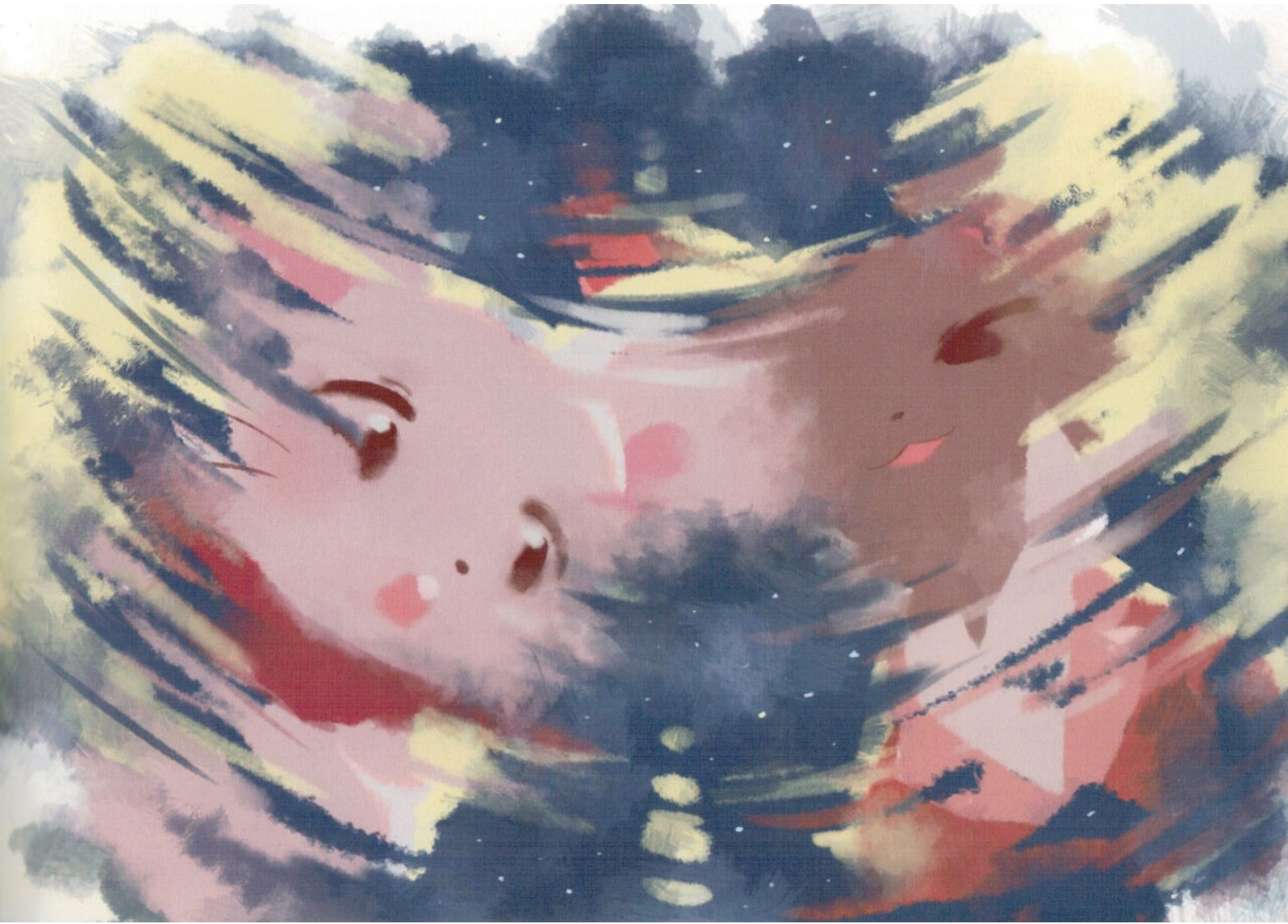


ねずみはため息をついて、そばにあった
水たまりの中の自分をのぞきこみました。

「ぼくはいつまでひとりなの…？」

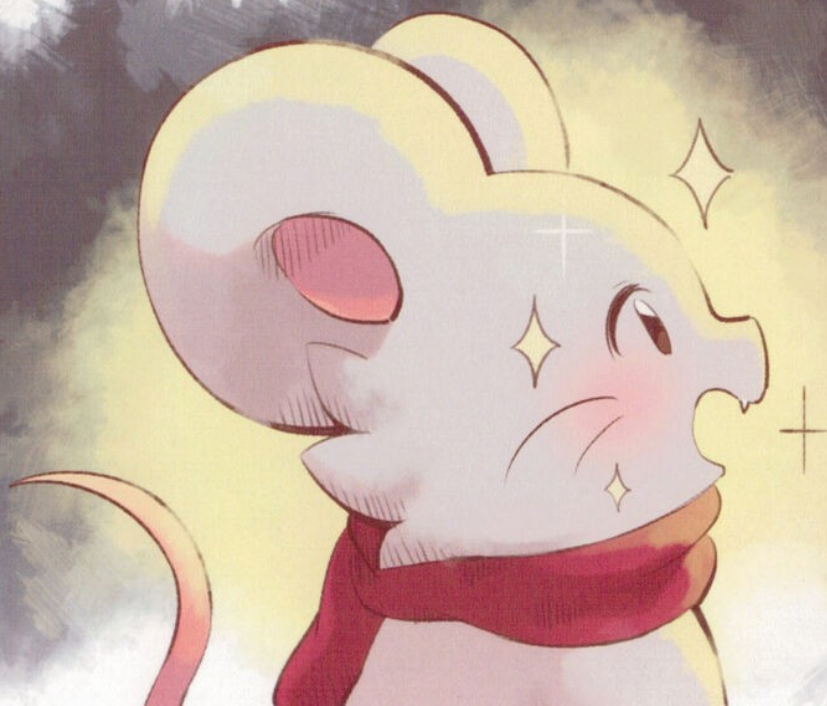
「今日までだよ、美味しそうなねずみさん」


水たまりのねずみの後ろに、大きな猫が一人。
ねずみは驚いてふりかえりました。



そして、ねずみは思わず笑顔になりました。

「…ぼくを 見つけてくれたんだね！」





猫はびっくりしました。
猫に会ったのに、こいつは
食べられないとでも思っているのか？



猫は少し考えて、ねずみの顔を見たあとニヤッと笑いました。

「ああ、そうだよ、ずっと君を探していたんだ」

「うれしい、ぼくのこと探してくれる人がいたなんて。
でも お兄さんはだれなの？」

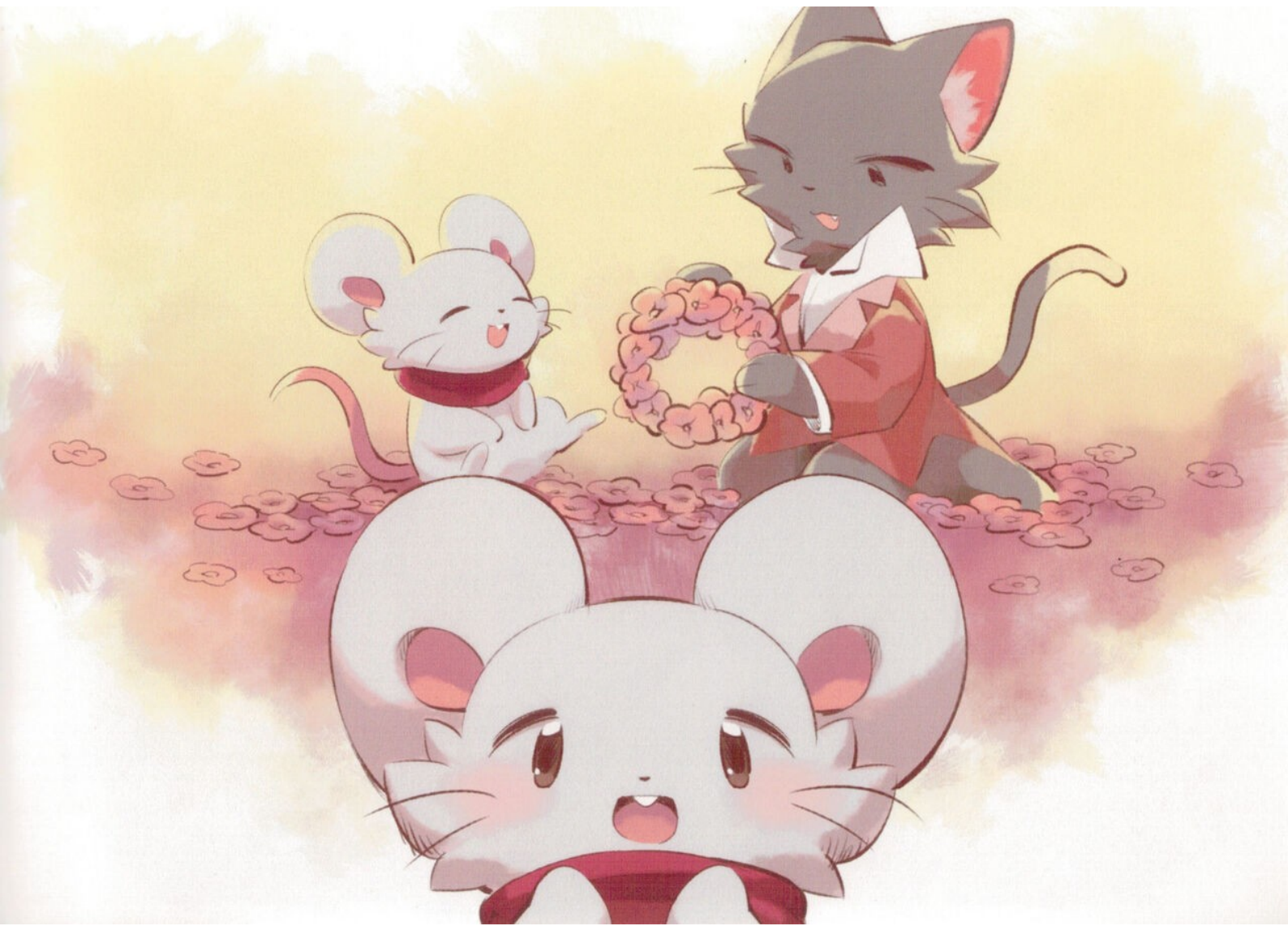
猫はドキッとしました。



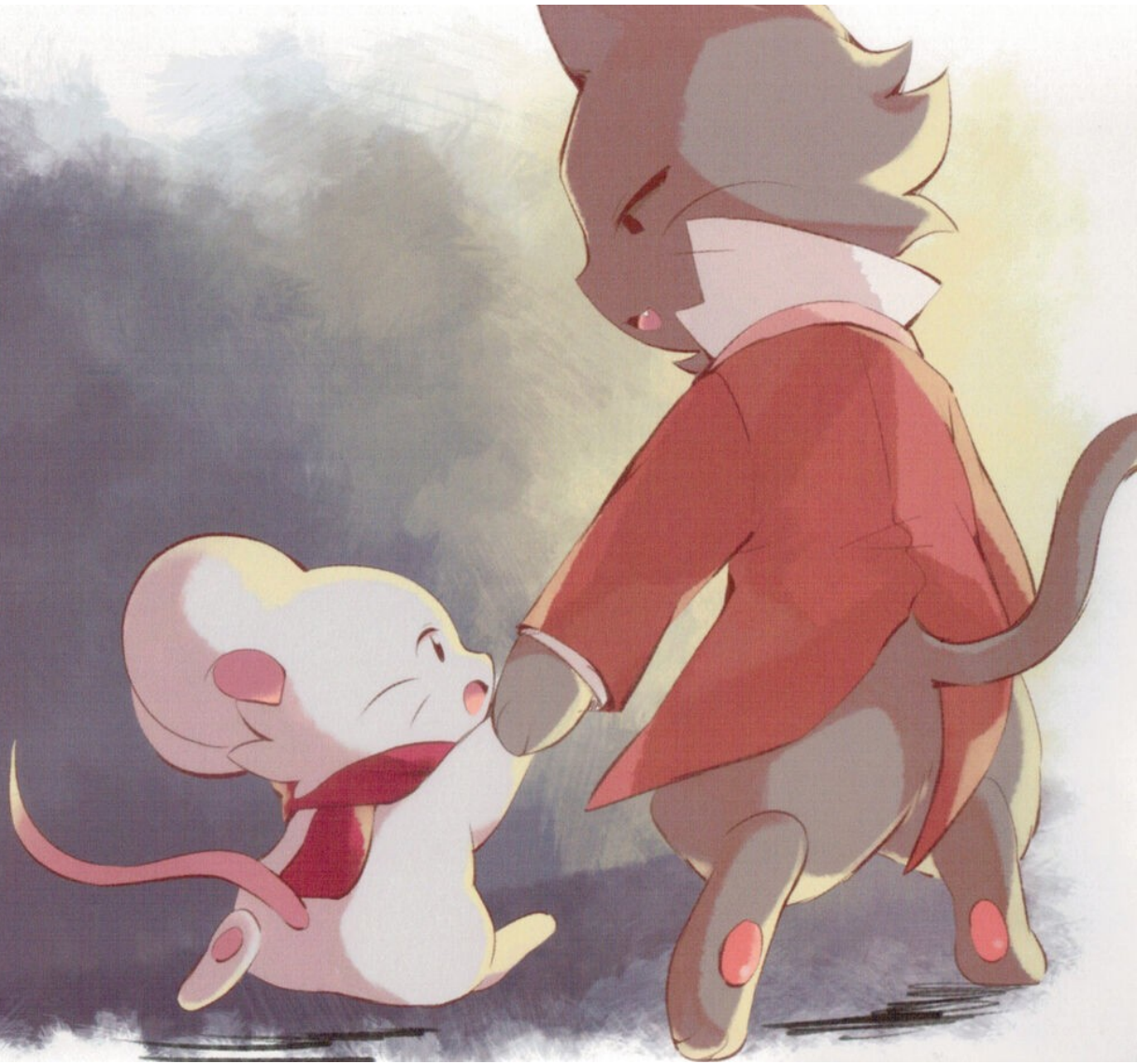
「私は、その…君の友達になりたい猫だよ」

「友達？ほんと？お兄さん、僕と友達になってくれるの！？」

あせる猫にまったくうたがいなしのねずみ。
これから食べられるというのに…小さな瞳をきらきらさせて、
なんて顔をしているんだろう。
猫は少し、このまま食べるのはもったいないと思いました。



猫はねずみを自分の隠れ家に連れていく事にしました。
ねずみは知らない猫について行ってしまいました…。



着いた先は路地裏の小さな古い小屋。
少しホコリがついたベッドにすわると、
猫がお茶を用意してくれました。



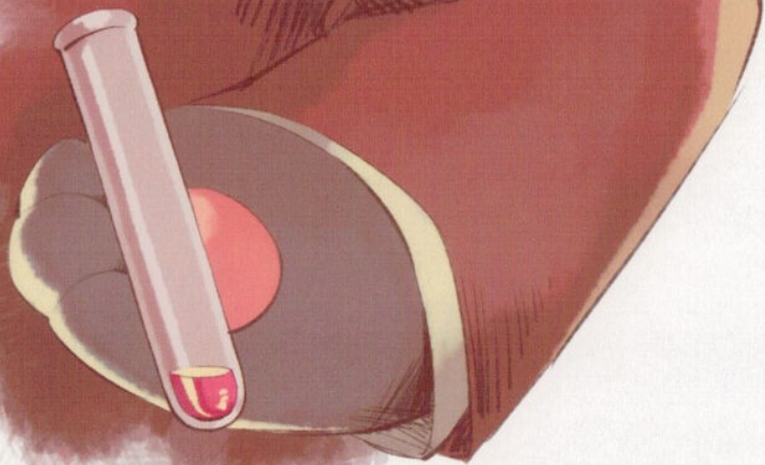


「このお茶、とってもおいしい…。
なんていう…お茶なの…？」

ねずみはお茶を飲むと、とろけるように
ベッドに倒れ込んでしまいました。



「そのお茶はいちご茶だよ。…薬入りのね。」



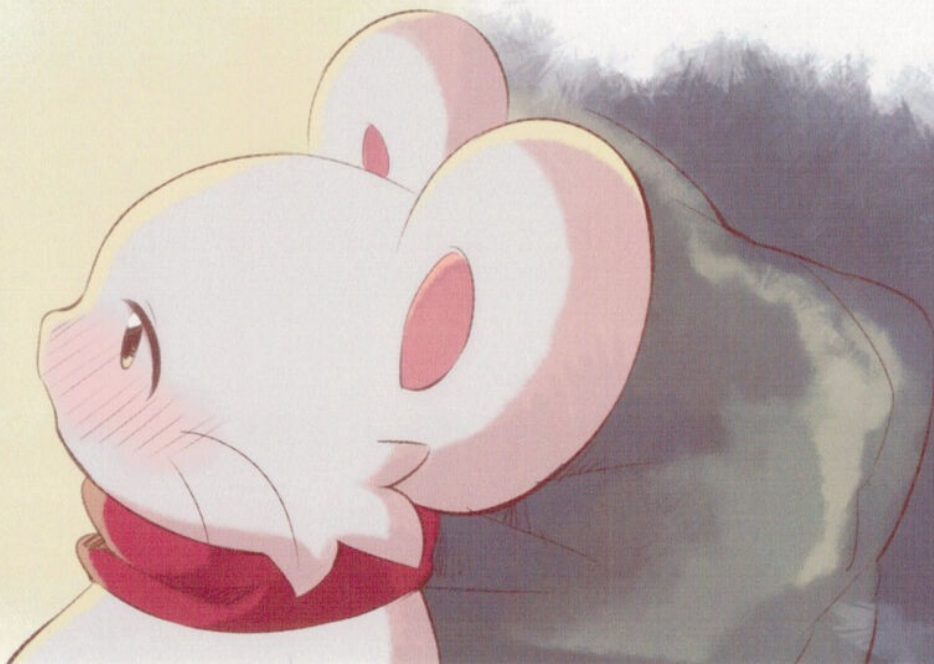
……目が覚めると目の前には猫が細いおめめを
キラキラさせてこっちを見ていました。

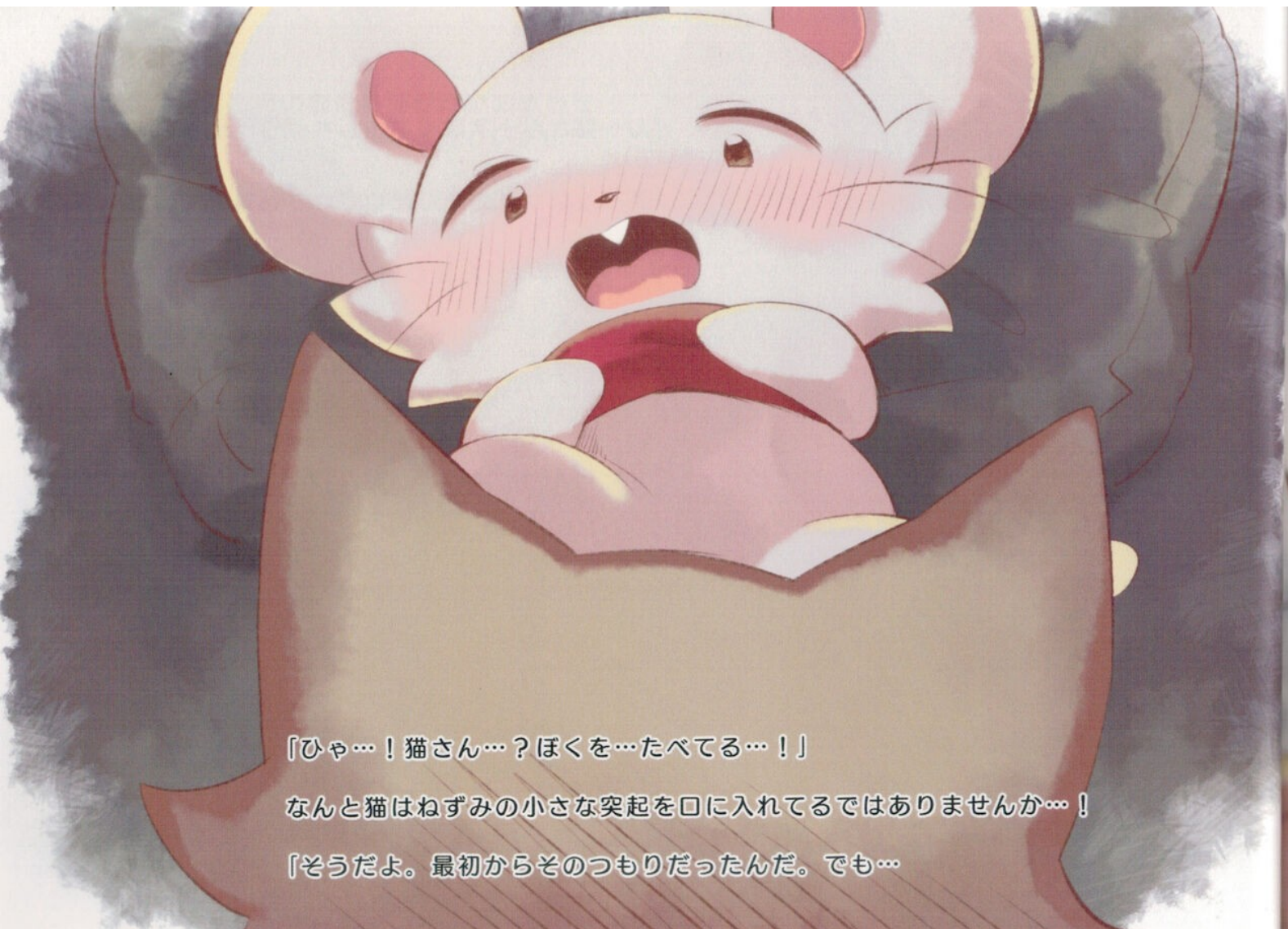


「ん…猫さん…？ほくどうしちゃったの…？」

「やっと目が覚めたんだね。夢でも見てたのかい？」

ねずみの体はなんだか火照っていました。






「ひゃ…！猫さん…？ほくを…たべてる…！」

なんと猫はねずみの小さな突起を口に入れてるではありませんか…！

「そうだよ。最初からそのつもりだったんだ。でも…」



全部食べるのはやめることにしたんだ。」

「ん…！」

ざらざらの舌で舐められて、ねずみは自分でも聞いた事のないような声をあげました。逃げようとしても足に力が入りません。

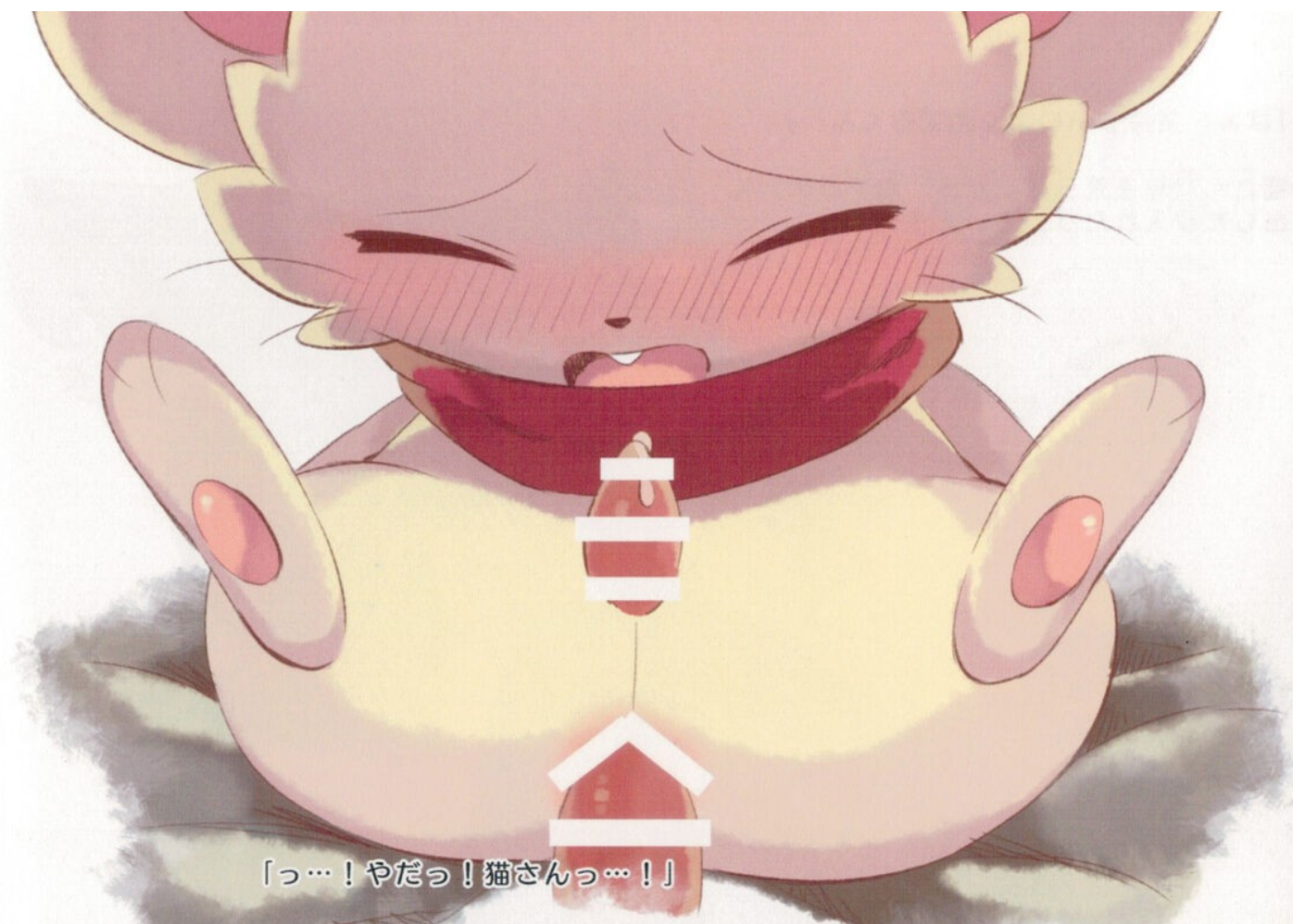
「猫さんどうしよう…

ぼくの体、変になっちゃったよお…」

「そうかい…？それなら、私のも食べてくれよ。」

猫は自分の大きくなったものを、
ねずみの小さな体に入れようと思いました。





「っ…！やだっ！猫さんっ…！」

ねずみが拒むすきはありませんでした。みつでとろとろになった猫のそれはすんなりねずみの穴に入ってしまいます。

「はぁ…気持ちいいよ、ねずみくん…」

猫さんは息を荒らげながら、ねずみの穴に出したり入れたりしています…。





「どうしてっ…あ…!んうっ…!!」

「こんなことするのは…初めてだったかな…?」

こんなこと?友達ってというのはこういうことをするのかな…?

「ねえ、猫さん…。僕たち…友達…？」

ねずみはほっぺを赤くして聞きました。

「…そう。私達は友達だよ。」

猫は少し迷って、そう言ったあと、
ねずみに口付けをしました。





舌が、どんどんねずみの口の中に入っていました。
ねずみは嬉しい気持ちと不思議な気持ちが混ざりあって、
顔がとろんとしていました。

猫は興奮して大きく体を動かしました。

「ねずみくんっ…すきだよ…」

「ぼくも…猫さんがすき…」



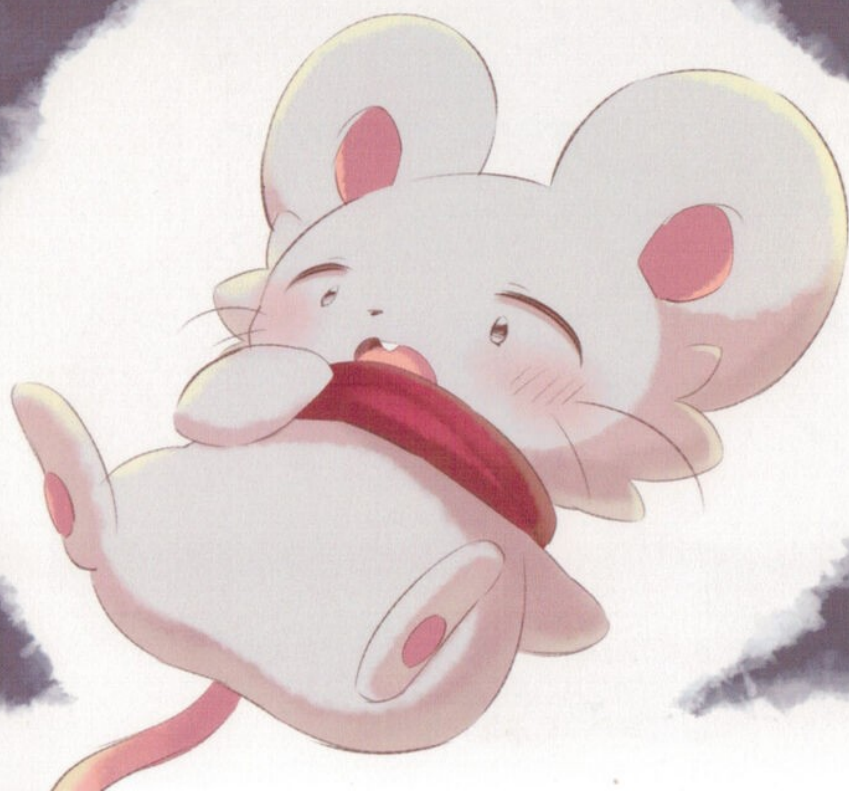
「っ...!!」びゅる...

ねずみはいっぱい声を出して、安心したかのように
体をしずませました。



そのとき、猫のおなかがぐゅ〜っと音をならしました。
そういえば、猫は何も食べていなかったのです。

「猫さん、ほくを食べちゃったりしないよね...?」



猫はねずみのびっくりした顔を見て、抱きしめました。

「ねずみくんを食べたりなんてしないよ。
友達になったんだろう？」

2人は幸せそうに眠りにつきました。



このたびはこの本を手にとってくださり、ありがとうございます。
はじめての本で、前から作ってみたいかった絵本に挑戦しました。
ぜひ感想送ってくださると嬉しいです。

またオリジナルで絵本描こうかな、と思っています。
今度はクオリティも上がっていると思う(たぶん)ので期待です。。

発行日 2021/09/20
サークル どんぐり組
発行者 タオル
Twitter @taolli
連絡先 yxj230299871@gmail.com
印刷所 おたクラブ (大阪印刷株式会社)



無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載は禁止です。

